

## 環境のオントロジー II

竹 原 弘

### はじめに

本稿は『徳山大学論叢43号』に掲載された「環境のオントロジー」の続編である。本稿は、43号に掲載された稿の「序論」に続く、「補論」と、第二章の「環境の空間性」によって構成されている。

まず、「補論」においては、ドイツの社会学者である N. ルーマンの社会システム論と我々の立場との相違点と類似点とを明らかにする。ルーマンの場合、意味の主体は人間ではなくて、システムである。それは、ルーマンの言う意味が世界の複雑性を縮減する働きをするが故であり、意味はシステムにおいてのみ複雑性の縮減をする働きを為す。それに対して、我々の立場では、意味は人間存在が己れの有り方を確立するための媒体であり、従って、意味の主体は人間存在であり、意味はシステムの中にのみ存在するのではなくて、世界にも存在し、人間存在はシステムに内属せずに、意味へと企投することが出来る。第二章では、人間存在の空間処理能力の分析から始まり、空間としての環境の意味化の過程を分析する。環境問題として問題となる空間は日常的には意味的に無化された空間であり、人間存在が日常性を確立する場合に目立たない空間である。それが、人間存在の日常的有り方との関わりにおいて明らかになり、人間存在が将来に亘って存在し続けることを脅かす事態と為った場合に環境問題が生起する。環境問題を意味との関わりにおいて取り扱うことによって、人間存在の日常的有り方と環境の空間性との関連を明らかにしたのが、第二章である。

## 補論

(0-11)

ここで我々はニクラス・ルーマンにおける社会システム論の、世界、意味、社会システムの関連性と我々のそれとの相違を明らかにしなければならない。そのためにまずルーマンの基本的考え方をあらかじめ粗描しなければならない。そして、それに基づいてルーマンと我々との間の基本的違い、あるいは類似性を浮き彫りにしてゆきたいと思う。

まずルーマンの世界についての考え方であるが、ルーマンは世界を考える場合に、常にシステムとの関連において考える。すなわち、ルーマンにとって世界はこう有るべきであるという必然性をもった事実の総体ではなくて、常にそれ以外の可能性を孕んだ総体である。つまり、世界とは可能性の過剰を孕んでいるのであり、そこにおいて人間は常に自らが期待する以外の事態に遭遇する可能性を有しているのである。つまり、ルーマンにとって世界は存在の観点からではなく、複雑性の観点から考察しなければならないのである。

「世界は（社会システムと違って）環境（Umwelt）が存在しないが故に、脅かされることもない。システムの場合と違って、世界の存続は決して脅かされない。そして、それ故に問題にならない。一般に何かが存在する限りにおいて、世界も存在する。従って、存立が脅かされるというすべての危険は、世界の中での可能性として考えなければならないし、存立の消滅は世界の中で生ずるのである。従って、世界はその存立の観点で問題になるのではなく、その複雑性（Komplexität）の観点で問題になるのである。」<sup>1)</sup>

「複雑性は、従ってコンピューター用語でいわれるように、また機械的に

---

注1) N. Luhmann: *Soziologische Aufklärung*, Westdeutscher Verlag Opland, 1971, S. 119.

邦訳『法と社会システム』土方昭監訳, 新泉社, 131ページ

は適切であるにしても、〈取り消し〉れるには及ばないのであり、むしろそれは括弧の外に置かれるにすぎないし、それは一瞬ごとに常に別様の仕方で縮減されるとともに、複雑性は普遍的に構成された選択の領域として、つねに新しいまたつねに別様の選択の〈出所〉として、つまり世界として依然保持される。」<sup>2)</sup>

すなわち、世界は、それが孕む複雑性の縮減という観点において、つまりいかにして世界の有する複雑性を縮減しうるかといった観点において問題になるのである。そして、可能性の過剰としての複雑性を縮減するものとして、ルーマンは意味というものを考える。

「意味はいかなる選択の出来事でもなく、むしろシステムと世界間の選択的關係である。しかしそのことによって意味は十分に特徴付けられない。むしろ意味による体験処理の特異な独自性は、複雑性の縮減と維持とを同時に可能にする点にある。即ち、世界が体験の決定作用の中で、単なる意識内容に縮んでしまって、その中に消滅してしまうことを阻む、選択の形式を保証する点にある。」<sup>3)</sup>

「即刻には顕在化しない潜在能力によって、体験を絶えず現在の的に随伴する、そうした世界の構成は、人間に固有の否定の能力によっている。その概念的な追構成は、意味を構成する体験における否定の機能的優位が明瞭であることを前提にする。」<sup>4)</sup>

「要約すれば、意味的体験処理に求められる機能様式は、いまや第一の、そして基礎となる契機においてより詳細に規定される。すなわち、意味的体験処理は、次のことを通して複雑性の縮減と保存を行なう。すなわち、直接に与えられた明白な体験に他の可能性への参照や再帰的な一般化的な否定の潜在能力を混ぜあわせて、そのようにリスクを担った選択に対して備えると

---

2) N. Luhmann, J. Herbermas: *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1990, S. 33f.

邦訳『批判理論と社会システム理論』佐藤嘉一他訳、木鐸社、38-39ページ

3) *Ibid.*, S. 34, 邦訳、39ページ

4) *Ibid.*, S. 35, 邦訳、39ページ

いう仕方である。』<sup>5)</sup>

すなわちルーマンのいう意味は、世界が孕んでいる過剰な可能性を縮減する働きを行なうのである。つまり、世界の中の過剰な可能性、偶有性の中から一つのことを意味として選択することによって、選択されなかった残りの可能性は、「そうではないもの」として、すなわち否定性として淘汰されることによって、過剰な可能性が縮減されるのである。ある一つのことを意味的に把握するということは、世界において生起しうる過剰な可能性をその意味において縮減し、それをある意味として把握する限りにおいて、別の意味を有する存在者への関与の仕方を排除する、すなわち否定するわけであり、したがって、否定性において意味を把握するということは、その意味への関与形式以外の関与形式を排除するという意味において、世界の複雑性の縮減であり、可能性の過剰の縮減である。

そして、意味の主体は、ルーマンにおいては、システムであり、人間ではない。ルーマンによるならば、人間も既にシステムなのであり、システムの一つなのである。

「意味概念が第一であり、従って主体概念への関連なしに規定しうる。何故ならば、後者（主体概念）は、意味的に構成される同一性として、意味概念を既に前提しているからである。」<sup>6)</sup>

「主体は〈そうであり他ではなく〉有ることを基礎付ける以前に、まず第一に不確定な選択として考えられなければならない。そして既に選択が、最初に基礎付けがでなく、またいわんや真理がではなく、相互主観的に構成されている相互行為の諸連関において問題になる。」<sup>7)</sup>

人間存在は、ルーマンにとって、主体として有る以前に、既にその存在が意味を前提にして構成されているのであり、自我という場合に、それは独自のアイデンティティによって貫かれている以前に、相互主観的な意味によ

---

5) *Ibid.*, S. 37, 邦訳, 42ページ

6) *Ibid.*, S. 29, 邦訳, 32-33ページ

7) *Ibid.*, S. 327, 邦訳, 412ページ

て構成されているのにほかならない。あるいは、自我の存在には常に他我的存在が前提とされているのであり、いわば自我と他我との相互作用において、自我のアイデンティティが確認されるのである。すなわち、人間存在は本質的に他我との相互作用において有るのであり、孤立した自我などは考えられない。その意味においても、人間存在はそれ自身がシステムにほかならない。

そして、システムはそのシステムの環境世界との間の差異として捉えられる。

「環境はシステムに相関的な事態である。すべてのシステムはその環境世界から自己を区別している。それ故に、おのおののシステムの環境世界は異なる。従って、環境世界という統一体もまたシステムによって構成されている。《あるシステムの》環境は、システムのネガ的相関項である。環境世界はオペレーション能力を欠いた統一体であり、それはシステムを知覚したり、それを取り上げたり、それに影響力を行使したりすることはできない。それ故に、システムはその環境世界と関連していることと、その環境世界が未規定なままでいることを通して、そのシステム自体を統一しているということが出来る。環境世界は、端的に言って、《システム以外のすべてのもの》なのである。」<sup>8)</sup>

「システムと環境世界の差異についてのこれ以上の分析は、環境世界がシステム自体よりいつもはるかに複雑であるという仮定を出発点としている。このことは考えられるあらゆるシステムに当てはまる。このことは社会という最も包括的な社会システムにも当てはまる。」<sup>9)</sup>

すなわち、あるものをシステムとして捉えるならば、それ以外のものがそのシステムの環境世界である、ということになり、その環境世界はあくまでもそのシステムにとっての環境世界であり、いわばシステムによって構成さ

---

8) N. Luhman: *Soziale Systeme*, Surkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1988, S. 249.

邦訳『社会システム論(上)』佐藤勉監訳, 恒星社厚生閣, 287-288ページ

9) *Ebenda*.

れた環境世界である、ということになる。そして、そうしたシステムと環境世界の差異は何であるか、という問題に対して、ルーマンは複雑性の差異である、と答える。すなわち、システムに属さない環境世界においては、システム内におけるより、より多くの複雑性を孕んでいるのであり、システム内においてはそうした複雑性が縮減されている。既に述べた様に、複雑性の縮減を為すのは意味であり、そして意味の主体は人間主体であるよりも、システムである、というのがルーマンの考えであるが、そうであるならば、システムと環境世界とを境界付ける契機は、空間的な要素ではなくて、意味である。

「空間的境界という分かりやすいイメージは、それが境界を越えて点対点の相関を示す限りにおいて、想像力を誤りに導く。(例えば)家の途切れる所で、庭が始まる。この場合境界は、その時々確定されたものとして表象される、他のものとの近さや遠さの関係を秩序付けている。意味境界(Sinn Grenzen)は、——空間の境界もまた意味境界を、勿論象徴することが出来るが、——複雑性の落差を秩序付ける。意味境界はシステムと境界を異なる複雑性の可能的領域として切り離す。環境世界は、システムよりも、そして結局は、世界一般という無規定的な複雑性よりも常に大きな複雑性を持つのである。意味境界はこの差異を際立たせ、これを体験の方向付けのために使える様にする。意味境界は、システムの中では、行為の可能性の明確化された既知の(あるいはすぐに認識出来る)諸条件が当てはまるのに、そのシステムの外部ではこれに対して<何らかの>他の諸条件が当てはまることを指示する。」<sup>10)</sup>

すなわち、あるシステムに属している意味は、そのシステムに属している限りにおいて複雑性を縮減しているのであり、その限りにおいてそれはそのシステム内においてしか有効ではなく、そのシステムの外、すなわちそのシステムの環境世界においてはその意味は有効に複雑性の縮減の機能を果たさない、という意味において、意味がシステムと環境世界とを境界付けている

10) *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie*, S. 72f.

邦訳、76-77ページ

のである。

(0-12)

以上において、ルーマンの基本的考えを粗描したのであるが、次に以上のことを踏まえて、ルーマンの考えと我々の考えの違い、あるいは類似点を浮き彫りにしてゆきたいと思う。

まず、人間存在に関してであるが、既に述べた如く、ルーマンは人間存在(自我)も、意味を前提として構成されているが故にシステムであると述べているのであるが、それをシステムと呼ぶかどうかは別にして、我々の人間存在の捉え方もルーマンにはほぼ近いものである。すなわち、既に述べた如く、<sup>11)</sup>人間存在のその都度の有り方は意味への己れの存在の適合によって確立されるのであり、人間存在の存在形態と意味とは不可分離的な関係にある。また、人間存在が諸々の意味へと企投しうる存在可能性も、意味を前提として考えなければならない。すなわち、人間存在の存在の内には、諸々の意味への適合形態の痕跡が蓄積されているのであり、それが各々の人間存在の振る舞い様式を規定している。言い換えるならば、人間存在の身体的有り方の内に、ある有意味的存在者へと自らの身体的有り方を適合せしめて、その存在者の意味を己れの身体的有り方の内へと還元して、ある振る舞い様式を構成する行為パターンが、身体の運動機能の内に刻印されているわけであり、その意味への適合パターンの刻印の多少が、その人間存在の行為パターンの多少を規定し、様式を規定するのである。例えば、自動車教習所に通い、自動車という有意味的存在者を構成する諸々の有意味的存在者へと己れの有り方を適合せしめる能力を、己れの身体の運動機能の内に刻印することによって、すなわちそうした意味を前提して、自動車を運転するという有り方、行為パターンが可能となるのである。

さらに、人間存在が己れの有り方を構成する契機としての意味は相互主観的なものであり、私にとっても他者にとっても同一の意味を有するものであ

---

11) 「環境のオントロギー」『徳山大学論叢』43号参照

り、またそれへの関与形態は、私の場合も他者の場合も同一であるが故に、私は他者へと存在論的に通路付けられているのであり、他者の有り方を理解するし、他者も私の、ある意味を介した有り方を理解する。

ルーマンと我々との根本的違いは、意味はシステムに属するか世界に属するか、ということに関してであり、既に述べた如く、ルーマンは、意味はシステムに属することによって、世界の複雑性を縮減する役割を果たすと述べているのであるが、我々の立場は、これも既に述べたことであるが、意味は世界の内に有ると考える。これは意味の捉え方の違いであると思うが、ルーマンは、既に述べた如く、意味は世界の複雑性の縮減という機能を果たすものであると考え、従って、世界の複雑性が縮減されたシステムに属するということに有る。意味が複雑性を孕む世界に属することになると、矛盾をきたすことになるからである。

我々の意味の捉え方は、意味は人間存在が自らの有り方を確立する契機であり、人間存在が有意味的存在者の有する意味へと自らの存在を適合せしめることによって、自らの有り方を確立しうる契機となるものである、ということである。この様に意味を考えるならば、意味がシステムに帰属すると考える必要はないのであり、従って、我々は意味は世界の内に存在すると考える。従って、世界は意味の集合態であり、人間存在が己れの存在をそれへ向って投げ掛けて、自らの有り方を構築する場であると共に、世界が人間存在にその都度の有り方を贈与するのである。

従って我々は、世界を、ルーマンの如く複雑性の観点から捉えるのではなくて、存在の観点から考える。すなわち、世界が現在かく有る形態で存在するのは、ある必然性においてである。すなわち、無数の実存の痕跡として、世界を構成する意味が世界の内に散在しているのであり、世界をかく有る形で構成しているのである。そうした無数の実存の痕跡が、現在世界の内に存在している我々の有り方を規定しているのであり、我々のその都度の有り方は実存の痕跡としての世界から贈られることにより、形成されるのである。あるいは、人間存在が諸々の意味へと己れの存在を適合せしめることによ



り、その都度の有り方を確立し、諸々の意味を維持しているのであり、従って世界の現在有る形態を維持しているのである。

(0-13)

ルーマンにとってシステムをシステムたらしめているのは意味であり、先に述べた如く、システムと環境世界との境界は意味が複雑性の縮減のために効力を発揮するか否か、ということ、すなわち、意味が意味として有るか否かというところに有る。我々の立場では、先に述べた如く、意味はシステムにのみ内在するのではなくて、世界の内に、実存の痕跡として散在しているが故に、システムをシステムたらしめている要因として意味を考えることは出来ない。我々の立場からするならば、システムをシステムたらしめているものは、世界に散在する意味を限界付け、そのシステムに帰属する意味と、帰属しない意味とを明確化することにより、システムに内属する意味を限界付け、構造的に配分すること、であり、そのことによってシステムがシステムとして存立するのであり、あるいはシステムと、ルーマン流の表現を使うならば、システムの環境世界とを境界付けるのである。意味、すなわち有意味的存在者は、諸々の人間存在による意味への企投によって、その意味が人間存在の存在の内へと取り入れられることによって、ある有り方を確立せしめるために、最も適した形で世界の内へと配属されることにより、意味集合態としての世界の今有る形態を形成しているのであるが、それは先にも述べた如く、無数の実存の痕跡としてそう有るのである。システムは、世界に散在するそうした意味のあるものを己れの内に取り入れることによって、世界に散在する意味を制限する。言い換えるならば、システムに内属する意味を規定することによって、それ以外の意味を排除し、世界の内における、そのシステムが関わる意味の領域を明確化する。システムがシステムとして自らを維持すること、すなわちある意味を己れの内に取り入れて、ある意味を排除するというかたちで、特定の意味を保持し、それを構造化する契機が有るのであり、それは例えば、ある商品を生産し販売するとか、教育をすると

か、等であるが、そうした契機が世界の内に散在する諸々の意味のあるものを集合せしめ、あるものをシステムから排除する。そして、システムは、システムに帰属する諸々の人間存在の相互主観的存在連関を分節することにより、各々の人間存在が関与する意味領域を確定し、また各々の人間存在が関与しない意味領域を確定することによって、各々のシステム内での分節された存在連関に基づき、特定の有り方を配分する。すなわち、システムは、それに内属する諸々の人間存在の相互主観的存在連関を分節することにより、各々に役割を与え、各々が関与すべき意味領域を明確化し、制限する。

ルーマンにとって世界とは、システム-環境世界を包み込む総体であり、そこにはもはやシステム-環境世界差異は存在しない。

「社会システムを、ここでは互いに指示しあい、それらには属さない諸行為である環境世界から区別することのできる、社会的諸行為の意味連関として理解すべきである。内部と外部の差異化のうちに自己の構成原理をもつこのシステム概念を前提にし、さらにそれを越えようとするならば、もはやいかなる境界もない準拠単位が問われる。つまり世界が問われる。しかし、世界はシステムとして把握されえない。何故ならば、世界には自己と区別すべき〈外部〉が無いからである。我々が世界をシステムと考えようとするならば、直ちに世界の環境世界を考えなければならないだろう。さらに、そうした考えを引き出す世界概念がこの環境世界へと移行してしまうだろう。」<sup>12)</sup>

ルーマンは、世界は無規定的なものである、と述べているのであるが、確かにシステムの無い状態としての世界、すなわち複雑性が縮減されない状態の世界、つまりシステムとの関連の無い世界、といったものは考えることは出来ない。現実には、世界の複雑性は常に何らかのかたちで縮減されているのであり、常に複雑性を縮減するものとしての意味が存在しており、またその意味の主体としての社会システムが存在しているわけであり、従って、世界をそうした意味とかシステムとの関連なしで考えることは出来ないであろう。

---

12) *Soziologische Aufklärung*, S. 115, 邦訳, 130ページ

ルーマンの論敵であるハーバーマスは、ルーマンとの討論に際して、次の様に述べている。

「従って、世界は一つの問題を表わしている、ということができる。しかし、問題視される世界は、少なくとも等根源的なシステムが有って、そのシステムに対して世界が一つの問題を表わしている、というのでなければ考えることが出来ない。これに対して、ルーマンは、構造一般の形成、いわば〈システム〉という組織形態そのものの発生を、根源的問題の解決として捉えることが出来ると考えたがっているために、すべての発端から、あるいは〈即自的に〉一つの問題を表わすとされる世界、という無意味な概念に行き着いてしまう。世界の複雑性が問題視されるのは、諸システムの存立にとってのみである。世界複雑性の縮減という課題は、それ故に、(この準拠枠にあっては) 様々な可能なシステム構造から独立に規定することは全く出来ないのである。」<sup>13)</sup>

従って、ルーマンの場合の世界複雑性という問題は、社会システムの存立から遡及して考えられた作業仮説の如きものではないだろうか。ルーマンはいわばメタ社会学として、社会の成立の根拠を複雑性の縮減として、理論化しようとしているのであるが、世界の複雑性はいわば縮減された状態においてしか理解されないものであり、世界の複雑性を〈即自的に〉把握することは、ハーバーマスもいう如く、不可能である。

我々の立場においても、似たことが言えるわけであり、意味を秩序付け構造化するシステムの存立しない世界は考えることは出来ない。いかなる世界形態においても、常に何らかのシステムが存立していたし、また現に存立している。しかし、我々の立場においては、世界が人間存在に対して機能する側面と、システムが介在することによって、人間存在の有り方に、システムが機能する側面とを分離して考えることが出来る。何故ならば、意味の主体は人間存在であり、人間存在にとって意味は、世界に散在するものとしての

---

13) *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie*, S. 154.  
邦訳, 197ページ

それであろうと、社会システムによって統合され、構造化されたものとしてのそれであろうと、変わりはないのであり、人間存在の有り方を構成する契機となるという点では、意味が世界に有ろうと、システムによって統合されていようと同じである。言い換えるならば、人間存在は、諸々の有意味的存在者の意味へと関与することによって己れの有り方を構築する場合に、その有意味的存在者があるシステムに属しており、システムによって世界へと配列されたものであると考えようと、実存の痕跡として世界の中に存在すると考えようと同じである。例えば、ある男が街角に置いてある煙草の自動販売機を使って煙草を買おうとする場合に、煙草の自動販売機は明らかにシステムに帰属し、システムを介して街角に置かれたが故に、そこに存在しているのであるが、その男は、その自動販売機をそこに配列させたシステムとは関わりがないが故に、その男は、システムに帰属している存在としての役割遂行のために自動販売機から煙草を買うのではなく、意味-内-存在として、意味の集合態としての世界へと、己れの存在を接合させた存在者として、その自動販売機から煙草を買うのである。すなわち、人間存在は、確かに諸々の意味によってその存在は規定されているのであるが、諸々の意味へと関わる場合に、システムによってその有り方を分節され、意味領域を限界付けられた存在として関わる場合もあるし、そうではなく、意味集合態としての世界へと己れの有り方を接合せしめた存在者として、諸々の意味へと関わる場合もあるのであり、後者の場合には、人間存在はシステム-内-存在として、あるシステムに内属した存在者として考える必要はないのである。従って、システムの無い世界を考えることは出来ないが、意味が人間存在の有り方を構築する契機である限りにおいて、意味集合態としての世界へと自らの有り方を接合することによって、己れの存在の仕方を確立する人間存在という側面を考えることが出来るのである。つまり、複雑性の縮減という観点ではなく、己れの存在の構築の媒体という観点から意味を考えるならば、人間存在はシステムに内属する存在として意味に関与する場合と、世界へと帰属しつつ意味へと関与する場合とに区別することが出来るのである。

## II 環境の空間性

### (2-1)

人間は空間的存在である、という場合に、人間存在が空間という容器の中に入っている、ということの意味するのではなく、人間存在がその有り方において、自らの有り方に即して空間を開示せしめ、空間を空間として処理する能力を持つ存在である、ということの意味するのである。ハイデッガーは人間存在（現存在 Dasein）の空間的能力として開離（Entfernung）と、布置（Ausrichtung）とを挙げている。<sup>14)</sup>

「開離するとは、本来あるものの遠さ、すなわち遠隔性を取り消すこと、それ故にむしろ近付けること（Näherung）を意味する。現存在は本質上、開離しつつ有る。すなわち、現存在は、それがそれで有るところの存在者である限りにおいて、常に存在者を近さにおいて出会わしめるのである。」<sup>15)</sup>

「現存在は開離する内存在として、同時に布置するという性格をもっている。すべての開離において、その近付けることは、あらかじめある方面（Gegend）への方向を取っており、その方面から開離されたものが近付いてきて、そのようにしてそのものの場所が見出だされるようになるのである。」<sup>16)</sup>

人間存在が様々な存在者に関わる際に、ある存在者と自分との距離を取ること、あるいは距離を取り除くことがハイデッガーのいう開離であり、また距離を取り除きつつ、ある方向性に定位することが布置である。人間存在の、自らの身体が存在する場としての「ここ」は、いわば座標軸のゼロ点であり、そこから己れの身体を取り巻く諸々の存在者へと関わりつつ、その存在者との間の距離を取り除くことが、人間存在の根源的空間的経験である、

14) Martin Heidegger: *Gesamtausgabe Bd. 2*, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1977, S. 140.

15) *Ebenda*.

16) *Ibid.*, S. 144f.

とハイデッガーはいう。すなわち、そうした諸々の存在者への関わりの中において、存在者との間の距離を取り除くことから、数学的に距離を測定するという、いわゆる客観的な距離が派生的に生じてくるのであり、その逆ではないのである。

そのようなことをボルノウは次の様に述べている。

「人間は諸物の中に有る物ではなくて、自分のまわりの環境世界との関わりをもつ主体であり、その限りにおいて、その志向性によって特徴付けうる主体である。人間は、空間に関わりをもつ限り、——あるいはより慎重に、彼が空間の中で諸物に関わりをもつ限りにおいて、——人間は空間内ではなく、むしろ諸物への人間の関係が人間の空間性によって特徴付けられているのである。あるいは、別の言い方をすれば、人間が空間の中に居るその仕方は、人間を周りから囲んでいる世界空間の規定ではなく、主体としての人間に関連付けられている志向的空間の規定である。」<sup>17)</sup>

(2-2)

人間存在が意味集合態としての世界の内に有り、諸々の有意味的存在者の有する意味へと己れの存在を関わらしめ、その都度の己れの存在を築き上げる、ということの内にそうした空間処理能力が潜んでいるのである。すなわち、人間主体がある存在者を有意味性において捉えるということにおいて、人間存在は、その存在者との間の客観的な距離を飛び越えて、その存在者の意味を己れの存在へと取り込んでいるのである。例えば、私が街を歩いている時に、突然誰かに電話をしなければならない、ということを出して、自分の周囲に電話ボックスはないかどうかを探す。そして、100メートル先に電話ボックスを見付けたとする。その時に、私の存在は、電話ボックスと私との間にあるであろう100メートルという客観的な距離を飛び越えて、電話

---

17) Otto Friedrich Bollnow : *Mensch und Raum*, Verlag W. Kohlhammer, Stuttgart Berlin Koln, 1994, S. 272.

邦訳『人間と空間』大塚恵一他訳、せりか書房、257ページ

ボックスの有する有意味性を私の存在の内に取り込んでいるのであり、その場合に、私の身体が有る「ここ」を中心として、私の身体が存在の志向性は、私の身体が存在することを中心として、私の身体が取り巻く諸々の存在者を遠近法的に配列するのであるが、私の身体志向性は、その瞬間において、何よりもまず電話ボックスに向けられており、電話ボックスが私の身体を取り巻く諸々の存在者の中から浮かび上がり、それ以外のものは電話ボックスという存在者の意味を浮き上がらせる背景となって背後に退く。すなわち、その瞬間において、私の身体による根源的空間的経験において、電話ボックスという有意味的存在者が私に一番近いのであり、ハイデッガーがいうように、私の鼻の上に有るほど客観的には近い私がかけている眼鏡は、私の根源的空間的経験においては、遥かに遠いのである。私という存在は、電話ボックスを見つけた時に、電話ボックスに駆け寄り、電話ボックスという有意味的存在者の有する意味へと私の存在を適合して、電話をかけるという有り方をすべく身構えるのである。すなわち、その時に、電話ボックスは、私の身体が有る「ここ」との間の客観的距離を飛び越えて、私が存在していることが占有している領野に入り込んでいるのである。

また、人間存在は有意味的存在者の意味への適合による、己れの有り方の構築において、諸々の存在者が世界のどの方向に有るのか、すなわち何処に有るのか、についての理解を有している、あるいは理解が可能である。私は、私の研究室という空間において、電話が私の机の右側に有り、ドアが机に向って右側にある、ということを理解しているのであるが、そのことは私の研究室という空間を、そうした存在者のある場所が、あるいはそうした存在者の意味へと関わる私の存在が分節するのであり、私の空間処理能力を規定するのである。電話が置いてある私の研究室という空間の一点は、私が電話器という有意味的存在者へと関与し、電話をかけるという有り方を確立する際に、私の身体が、つまり私の腕が到達する空間として分節されており、また左側に有るドアは、私が部屋を出て行く際に、私の身体が向う方向性として、私の研究室という空間性を分節しているのである。空間内の諸々の存

在者は、私がそうした存在者へと関与することによって、その都度の己の有り方を確立する限りにおいて、私に固有の空間を分節するのであり、言い換えるならば、私が私の固有の空間において、諸々の有り方を確立する際に、それぞれの存在者の有る場所は、私の有り方の確立にとって独自の空間として分節されるのである。つまり、「ここ」は私が電話をかけるという有り方を確立する場であり、あそこは私が部屋を出入りする場であるといった具合に。すなわち、空間は方向付けをもっているのであり、その方向付けは空間に配置されている諸々の存在者によって分節された方向付けであり、そのことは私の空間的有り方を方向付けることと同義である。

従って、空間が開示されるのは、人間存在のそうした有意味的存在者への関与においてである、ということが出来る。すなわち、空間というものが根源的なかたちで見えてくるのは、意味との関わりにおいてであり、言い換えるならば、有意味的存在者によって分節された空間として、我々に対して開示するのである。例えば、私が座っている場所から、電話機の置いてある場所が遠い場合に、私は受話器を取る場合に、いちいち座を立て、腕を伸ばして受話器を取らねばならず、その場合に、空間は、私の居る空間的座標軸ゼロ点としての「ここ」と、受話器という有意味的存在者の有る「そこ」との間の距離の遠さとして、すなわち、私が「ここ」から受話器へと手を伸ばす際に遠すぎる距離として、空間は開示されるのである。

従って、私の根源的空間経験において、空間は等質的空間としてではなく、異質的空間として開示されるのである。私の研究室は、私がそこに住み込む以前は、すなわち何も無い時には、空虚な、いかなる分節もされない空間であったわけであり、そうした空虚な空間においては、私は真の意味で空間を見出すことは出来ない。つまり、私はそうした空虚な空間的場において、多様な有り方を確立することは出来ないものであり、ただ何も無い場所で突っ立っていることしか出来ない。ところが、その空虚な空間が諸々の存在者で満たされると、空虚な空間は様々なかたちで分節されることによって、私の多様な有り方を確立する場になる。例えば、あそこにワープロが置いて



あり、そこここに書架が有る、といった具合に空間は分節されて、異質性を帯びようになる。空間の異質性とは、私の根源的空間経験において空間が開示される場合に、私の身体が有る「ここ」と、私に関わる諸々の存在者が有る「そこ」との「間」として、すなわち私が自らの存在を関わらしめて、自らのある有り方を確立するために飛び越えなければならない空間として開示されるのであり、あるいは、そうした「間」を飛び越えることによって、「そこ」へと私の身体を赴かせることによって、「そこ」において私は電話をかけるという有り方を確立しうる、すなわち「そこ」は、私が電話をかける場として、私の存在を基盤として空間が分節されているのであり、あるいはもう一つの「そこ」へ赴けば、私がワープロを打つことが出来る場として分節されているのであり、そのようにして諸々の存在者で満たされた私の研究室は、諸々の意味との関わりにおいて、私の多様な有り方を確立しうる場として、異質な空間として、開示されるのである。

(2-3)

人間存在は、絶えず自らの有り方を超越することによって、現在の己れの存在を突き崩し、新たな有り方を構築する。すなわち、人間存在は絶えずある有意味的存在者の意味へと己れの存在を適合せしめることによって確立した有り方が構成する現前を乗り越えて行く動態性として捉えることが出来る。人間存在の前に現前する現前野は、自己の有り方、すなわち己れの存在へとある有意味的存在者の意味を巻き込むことによって確立した有り方に基づいて展開されるものであり、すなわち座標軸のゼロ点としての身体が占める場を中心にして展開されるものである。そして、その現前野は、人間存在の絶えざる己れの存在の乗り越えによって、乗り越えられる。己れの存在の乗り越えが現前野の乗り越えへと連動してゆくのである。そうした人間存在による絶えざる己れの存在の乗り越えは、意味集合態としての世界によって贈与されたものであり、言い換えるならば、世界が人間存在をして、絶えざる己れの存在の乗り越えへと迫るのである。すなわち、人間存在は、世界の

内において、絶えず己れの有り方を確立し、それを突き崩し、新たな有り方を確立すべく迫られているのである。

そうした人間存在の絶えざる未来へ向っての企投に基づいて、空間についての解釈が成立する。すなわち、人間存在はある存在者の意味へと己れの存在を適合せしめることによって築き上げた有り方から、現前野を構成し、そしてその有り方を崩すことによって、別の存在者の意味へと己れの存在を企投し、己れの現在の存在を乗り越えるのであるが、その乗り越えの運動において、次なる己れの有り方を予期し、それに基づく現前野を予期する。その予期において、空間についての解釈が成立する。つまり、現在の自分の有り方を築き上げている「ここ」から、「あそこ」へと赴き、「あそこ」に有る存在者へと己れの存在を適合せしめるならば、これこれの有り方が築き上げられるであろう、という予期において、「そこ」という空間的場は、これこれの存在者によって占められているであろうという解釈である。すなわち、その場合に、空間は意味として解釈されるのである。

ある有意味的存在者を媒介にして築き上げられた己れの有り方を乗り越えることによる、現前野の乗り越えによって、意味が意味として現前し、そして意味と意味との隔たりとしての根源的空間が開示されるのであるが、そのことによって、意味による自己の存在の分節化、意味を介したその都度の有り方の分節化により、空間が分節され、それぞれの空間的場が、自己のある存在構築の場としての意味を帯びようになる。

「我々は、人間によって具体的に生きられる空間は、分節されていない数学的空間とは異なって、一つの具体的中心の周囲に構築されているということ、そしてこの中心もやはり抽象的な数学的点として規定することは出来ず、むしろそれ自身一定の空間、すなわち外部空間の脅威的広がりに対して安らぎと安全性をもった閉ざされた空間を構成しているということから出発した。」<sup>18)</sup>

ボルノウは家屋という空間について、以上の様に述べているのであるが、

---

18) *Ibid.*, S. 163f, 邦訳, 155ページ

家屋はまさに分節された空間であり、それぞれの空間が意味を有している。家屋は物理的、客観的に分節されているだけでなく、そのように分節されて有ることによって、それぞれの空間が独自の意味によって経験される。すなわち、壁によって仕切られたそれぞれの空間は、人間存在に独自の有り方を与えるものとしての意味を有している。家屋の各部屋を仕切る壁は、他の部屋との間に物理的な区切りを付けるだけではなく、人間存在がその家屋の内に住まうこと、すなわち家屋を構成する意味連関へと己れの有り方を適合せしめて、住まうという有り方を構築することを分節することにより、住まうことに多様な有り方を配分するのである。家屋の住人がある部屋から別の部屋へと移行するということは、一つの超越であり、現前野の乗り越えの試みにはかならず、その場合に、彼（もしくは彼女）は、部屋を移動することによって、構築されたある有り方を放棄して、別の有り方を構築することを目指すのである。例えば、リビングルームから寝室へと移行するということは、リビングルームという空間を構成することによって、その空間にある意味付けをしているソファとかテーブルへの適合による有り方を突き崩し、寝室という空間を構成しているベッドという有意味的存在者の意味へと己れの存在を適合せしめるべく、自己の存在の乗り越えを目指すことである。そして、そうした一連の自己の存在の乗り越えによる現前野の乗り越えには予期が伴っている。すなわち、例えば家屋の中で、リビングルームを出て、階段を上がって、右の部屋に寝室が有るだろう、という予期である。予期する、ということは、現在においてある有意味的存在者と共に構築した有り方を突き崩して、新たな有り方を構築すべく、己れの存在を乗り越える存在運動に絶えず付きまとっているものであり、それは自己の有り方についての理解に基づいている。人間存在は、ある存在者を己れの存在の内に巻き込むことによって打ち建てた自己の有り方についての理解を有しており、その理解が、自己の存在の志向性にとって主題的であろうと、非主題的であろうと、そうである。この、己れの有り方についての理解が、次なる有り方への予期へと変貌するのである。ある存在者と共に確立した有り方を崩して、自己の

存在を乗り越える時に、自分は次に何をするのか、どのような有り方を目指しているのか、についての予期をもっているのであり、それは、階段を上がって右の部屋に行けばベッドに横たわることが出来るであろう、といった分節された空間についての予期を伴うのである。すなわち、自己の次なる有り方の予期は、自らの超越の運動が向う彼方についての予期、すなわち分節された空間についての予期であり、そしてそれは空間を意味的に解釈する予期である。自己の現在の有り方についての理解が、自己の存在の乗り越えの運動によって予期へと変貌する時に、自己の存在の乗り越えが目指す空間的場が、自己にどのような有り方を贈与してくれるか、という空間についての予期になるのである。そして、予期は空間を意味として解釈するのである。つまり、あの部屋には、自分が横たわることのできるベッドが置かれており、そこに行けば、自分はベッドという有意味的存在者の意味へと自らの有り方を適合せしめて、寝るという有り方を確立しうる、という空間についての解釈である。その場合に、寝室という分節された空間は、予期にとって、眠ることの出来る空間という意味として把握されるのである。

(2-4)

人間存在が意味を目指して、ある有り方を確立しようとするときに、その意味を付帯する有意味的存在者が占めている空間を目指す。すなわち、「そこ」に行けば、その有意味的存在者が有り、その意味へと自らの存在を適合せしめて、ある有り方を確立しうるであろう、という予期の下に、「そこ」を目指す。そして、自己の身体が占めている座標軸ゼロ点としての「ここ」という空間的場を越えて目指す存在者が存在する場としての「そこ」へと向う。すなわち、身体の乗り越えの運動、現前野の乗り越えの運動は、身体が現在占めている「ここ」を「そこ」へと転換し、目指す有意味的存在者が占めている空間としての「そこ」を「ここ」へと転換せしめる。そのような、自己の身体が占めている場としての座標軸ゼロ点を中心として、絶えず「そこ」を「ここ」へと転換せしめる運動が、自己の存在の乗り越えの運動であ

る。そして、そうした座標軸ゼロ点としての自己の身体が占める「ここ」を絶えず転換すること、つまり常に「そこ」を「ここ」へと転換する自己の存在の動態性によって、人間存在は絶えず己れの有り方を変えるのである。空間的な「ここ」の転換、「そこ」を「ここ」へと引き寄せる存在の動態性は、自己の有り方の転換を為す動態性である。そして、そうした存在の動態性は、既に述べた様に、自己の存在についての理解の変様態である予期に基づく。すなわち、「そこ」に赴けば、言い換えるならば「そこ」を「ここ」へと転換するならば、「そこ」という空間を占めているある有意味の存在者の意味へと己れの有り方を適合せしめて、ある有り方を確立することが出来るであろうという予期に基づいて、人間存在は絶えず、「そこ」を「ここ」へと転換しているのである。

先に述べた様に、予期は自己の存在についての理解の変様態であり、自己の存在についての理解が、自己の存在が己れの有り方を乗り越えるときに、理解は予期へと変容するのである。すなわち、予期とは、到来すべき自己の有り方についての理解である、といってよいだろう。つまり、ある有意味の存在者の意味へと、己れの存在を企投して、それを己れの存在の内に巻き込めば、これこれの有り方を確立しうるのである、という予期である。そして、予期には幾つかの段階が有る。確実な予期から、漠然とした予期まで幾つかの段階が有る。例えば、住み慣れた自分の家においては、何処に何が置いてあるということ、その家の住人は熟知している。その場合に、自己の存在の乗り越えとしての「そこ」を「ここ」へと転換する運動に伴う予期は極めて確実である。ところが、知らない何処かの都市に旅行した場合、その都市の何処に何が有るのか分からないから、例えば、喫茶店でコーヒーでも飲もうと思った時に、喫茶店を探さなければならない。その場合の予期は極めて漠然としており、だいたいの見当を付けて探すしかない。そうした場合には、都市の繁華街には喫茶店は有るはずだ、といった程度の予期しか出来ない。こうした両極端の場合の間に、幾つかの段階があるだろう。

従って、予期とは自己の有り方についての予期であり、それに基づいて

「そこ」という場に赴けば、自己のある有り方を確立しうる媒体としてのある有意味的存在者が有るだろう、という予期である。それ故に、予期は自己の有り方のある乗り越えの運動の彼方に有るであろう自己の有り方についての予期であるし、またそうした自己の有り方の乗り越えが目指す場についての予期でもあり、両方は絡まり合っている。そして、予期は、自己の有り方の乗り越えの運動が目指す有り方についての予期であるが故に、その乗り越えが目指す、自己の存在の彼方としての「そこ」を意味的に解釈する。例えば、自分の家のリビングルームという空間には、テレビやソファ、テーブル等の有意味的存在者の連関によって占められており、そうした幾つかの有意味的存在者の意味連関がリビングルームという空間に意味付与しているのである。すなわち、予期は、「そこ」としてのリビングルームに赴けば、ソファに座り、テレビを見、新聞を読み等々の有り方を確立しうる、ということを予期するのであり、言い換えれば、自己の存在の乗り越えの運動が、「そこ」としてのリビングルームにおける自己の有り方を予期することにより、「そこ」としてのリビングルームを意味的に解釈するのである。解釈とは、幾つかの意味連関によって構成されている空間における自己の有り方の予期に基づく、空間の意味付けであり、それは「そこ」に赴けば可能な自己の有り方についての解釈でもある。

## (2-5)

空間は、幾つかの有意味的存在者の意味連関によって占められていることにより、そこにおいて人間存在が、そうした意味連関へと己れの存在を適合せしめることによって確立する有り方が規定されるのであり、それ故に、空間は理解されるよりも解釈されるのである。解釈は、その根を理解と予期にもっている。既に述べた如く、理解と予期は、自己の有り方に関してであり、そうした自己の有り方についての理解と予期に基づき解釈が成り立つのである。「そこ」を「ここ」へと転換せしめることによって成り立ちうる自己の有り方についての予期に基づいて、諸々の有意味的存在者の連関が分節

する空間を、「～するための」場として解釈し、そのことによって空間を意味化するのである。空間の意味は、そこを占める有意味的存在者によって規定されるのであり、あるいは主体の側からいうならば、「そこ」において人間存在はいかなる有り方を確立しうるか、によって規定されるのである。有意味的存在者の意味は、人間存在がそれへと関わることによって確立する有り方に基づいて理解され、あるいは予期されるのであるが、空間の意味は「そこ」を占めている有意味的存在者の意味が、あるいはその意味を媒介にして確立する自己の有り方が構成するものであり、空間を占める諸々の意味連関は、それらが占めている空間を独自の色彩によって構成するのである。そして、人間存在は、諸々の意味連関によって構成された空間をそれとして見出し、経験するのである。そして、諸々の有意味的存在者の意味連関によって構成される空間はさらに、そこに置かれている諸々の存在者によってさらに分節される。すなわち、例えば、リビングルームの中の、この場所はテレビを見る場所、あの場所はソファに座ってゆっくりする場所、等の如く、一続きの空間は分節される。

自己の存在についての理解や予期に基づく空間的意味の解釈は、その解釈図式を意味集合態としての世界から汲み取る。既に述べた様に、世界は意味の集合態であり、無数の実存の痕跡がその中に沈殿しているのであるが、そうした世界から空間を意味的に解釈する図式、あるいは枠組みが与えられる。

「人間は、単に存在するだけで、空間にある図式を設定する。ほとんどの時に人間はその図式に気付かない。それがなくなって初めてその存在に気付く。生活を日常性から浮揚させる儀式は、空間の中に顕在する価値も含めて、生活の価値を人間に気付かせるように仕向けるのであるが、人間はそうした働きをする儀式に、空間的図式が存在することを刻みつける。空間の図式が成熟する段階は文化によって異なる。ある文化においては、それが未成熟であり、別の文化においては、生活のほとんどすべての分野を統合する見事な空間の図式となる。外面的な大きな違いが有るにもかかわらず、空間の

組織と価値を表示する語彙の中には、あらゆる文化に共通して見られる言葉がある。これらの共通する言葉は、人間的身体の構造と諸価値に由来する。」<sup>19)</sup>

「古代ローマばかりでなく、19世紀のパリにおいても、格の高い階は地面と同じ高さの商店のすぐ上の階であった。シャンゼリゼに面したアパートで、部屋が上階になればなるほど、住人は貧しくなり、召使や貧乏芸術家は最上階に住んでいた。しかし、現代の高層ビルでは、垂直方向の悪条件が高性能の機械類によって克服された結果、上階の方が高いことになっている。」<sup>20)</sup>

空間についての解釈図式は、身体的存在である人間存在の、意味集合態としての世界への適合様式に基づく、無数の実存の痕跡として、世界の内に沈殿しているものであり、空間の意味付けは、そうした解釈図式を世界から汲み取ることにより為される。例えば、先のイーファー・トゥアンの著作からの引用文によるならば、19世紀パリのアパルトマンでは、上階の部屋が格が低く、下の部屋の方が格が高かったが、現代では逆になっているのは、人間存在の世界適合様式の変容によって解釈図式が変貌したからである。すなわち、19世紀においては、現代の様にエレベーターもなければ、給水用の配管が十分に設備されていなかったために、上階に住む人々は部屋に行くのに長い階段を登らねばならず、また水をバケツに汲んで人力で上階まで運ばなければならなかった。ところが現代では、エレベーターがほとんどのアパルトマンに設備されており、給水用の配管も整っており、19世紀のような不便さは、上階の部屋に住む場合に無くなってきた。すなわち、19世紀と現代とでは、パリの住民の世界適合様式が変わったのであり、それは世界に定着している意味集合態の構造転換が生じ、世界が人間存在に贈与する有り方様式が変化したためであり、そのことによって、上階と下階という空間の価値付け

19) Yi-fu Tuan : *Space and place*, University of Minnesota Press, Minneapolis, 1977, p. 36f.

邦訳『空間の経験』山本浩訳、筑摩書房、57ページ

20) *Ibid*, p. 38, 邦訳、59ページ



を為す解釈図式に変化が生じたのである。19世紀においては、上階に住むことは、先に述べた不便さを伴わなければならなかった。すなわち、19世紀のバリの人間存在の世界適合様式に基づくならば、上階に住むことは、幾つかの不便さを甘受することになるわけであり、そうした世界の意味集合態が贈与する、世界適合様式に基づいて、上階の部屋と下階の部屋についての解釈図式が作り上げられたのである。ところが、現代において、エレベーターとか給水設備の完備によって、世界を構成する意味集合態の関係様式に変化が生じ、それに伴って人間存在の世界への適合様式が変わったために、19世紀において世界に沈殿していた解釈図式が変化したのである。

「明確な限界を通していろいろ際立たされた、聖なる空間の性格がとりわけはっきり見られるのは、勿論、人間によって計画的に設置された聖所である。それらは神殿であったり、都市であったり、あるいは単に個々の家であったりする。こうした場合も人間は場所を任意に選択することはできないのであり、むしろ場所の聖性を示す神々のしるしを顧慮しなければならない。神々はこの位置に都市や神殿などが建てられるべきであるというしるしを与えるにちがいないのである。」<sup>21)</sup>

古代人や中世の人々にとって、聖なる場所が彼等の生活空間の中心であり、都市の中心には巨大な神殿や教会が建設されたのであるが、こうした聖なる場所、あるいは宗教的に意味付けされた空間も、彼等の世界の意味集合態への適合様式に基づいて、世界の内へと沈殿させた空間についての解釈図式に基づくのである。聖なる場所としての神殿や教会は、彼等にとって特別な意味を有していたのであり、ある場所を聖なる場と決める以前に、彼等が相互主観的に、世界の意味集合態から、あるいはそれへの適合様式から汲み取る空間についての解釈図式の内に、すなわち空間を意味的に解釈するフィルターの中に、聖なる場所という要素がなければならぬわけであり、そうした解釈図式を通して、彼等はある場所を聖なる場所であると解釈したのである。

---

21) Bollnow : *op. cit.*, S. 143.

## (2-6)

空間についての解釈図式は、学ばなければならないものではなくて、世界の内定着して、世界の形態を規定する意味集合態へと帰属することによって、意味-内-存在として存在する人間存在が相互主観的に所有しているものであり、それは彼等の世界適合様式の一環として、彼等による意味への適合様式の内備わっているのである。すなわち、それは人間存在の、意味集合態としての世界への帰属様式の獲得と共に獲得されたものである。従って、ある時代のある世界において、独自の意味集合態が世界を構成しているが故に、そうした意味集合態への適合様式も独自のものであり、そうしたその時代の、その世界を構成している意味集合態への適合様式を身体の内刻印することが、空間についての解釈図式を身に付けることなのである。

解釈図式は、空間内にある諸々の有意味的存在者の存在連関を総合して、空間を意味化する働きをする。古代人や中世の人々が都市のある場所を聖なる場所であると意味付けるのは、彼等の世界への適合様式に基づく解釈図式のうちに、聖なる場所という要素があったからである。また、現代日本の家屋において、ある一室にリビングルームという意味付けを為すのも、現代日本人の意味適合様式に基づく解釈図式によるのである。現代日本人の行動様式、生活様式は和洋折衷であり、江戸時代以前の日本人の生活様式とは異なる。それは、世界を構成する意味集合態の変化により、人間存在の有り方が大きく変化したからであり、そうした存在様式の変化に基づいて、空間についての解釈図式が変わったことに由来する。純和式の意味連関に基づく存在様式においては、空間を解釈する図式の内リビングルームなる要素はないが故に、空間構築としての家屋の建築に際しても、空間を配分する場合に、リビングルームとして意味付けされた空間は作らない。

解釈図式は、人間存在が己れの有り方を乗り越える際に、己れに到来する有り方を、あるいは己れの有り方の媒体となる存在者の空間的配列を予期する場合に働く。すなわち、廊下の突き当たりにトイレが有るだろうとか、右の部屋は書斎であろう等々と予期する場合に、自己の世界を構成する意味集

合態への適合様式に基づく解釈図式を適用しているのである。予期するということは、己れの有り方の延長線上に有るであろう存在様態を予期することであり、それは空間についての解釈図式に基づいて空間を解釈し、意味化することによって可能になるのである。従って、解釈図式は認識のためのものである、というよりも人間存在が己れの有り方を確立するためのものである。

人間存在は世界の意味集合態の中に組み込まれることにより、そうした意味集合態へと己れの存在を接合する様式を自己の身体的有り方の内に刻印する。そのことによって、人間存在は諸々の有意味的存在者の意味へと己れの存在を適合せしめて、その都度の有り方を確立することが出来るのであるが、空間についての解釈図式は、人間存在の存在が組み込まれている意味集合態の内に沈殿しており、人間存在は、意味集合態へと自己の存在を組み込ませることにより、そうした解釈図式を身に付け、己れが存在を確立する際の手助けにするのである。すなわち、空間についての解釈図式は、世界に散在する意味集合態の空間的配列についての解釈の道具である。人間存在が空間的な己れの有り方に基づいて、空間的に己れの有り方を展開する際に、空間的な意味配列を統合して、意味配列が為されている空間を意味化する。

人間存在は、意味集合態としての世界の内へと組み込まれることによって、それらへと己れの存在を接合しつつ、己れのその都度の有り方を確立するのであるが、そのことは世界からの存在の贈与である、といえる。人間存在が世界の内々に散在する意味集合態へと己れの有り方を接合し、意味-内-存在として、諸々の有意味的存在者へと己れの有り方を接合することによって、その都度の己れの有り方を確立するのであるが、世界から贈与される己れのその都度の有り方は、意味集合態としての世界の内々に蓄積されたものであり、いわば無数の実存の痕跡である。そうした人間存在の存在様式の、世界の内への沈殿と共に、それに基づく解釈図式も共に世界の内々に沈殿する。世界の内々に沈殿した人間存在の存在様式は、人間存在が、意味集合態へと己れの有り方を接合することにより、諸々の意味を維持する限りにおいて、維

持され、伝承されてゆく。それと共に、そうした意味集合態に基づく、空間の解釈図式も共に伝承される。しかし、新しい有意味的存在者が、世界により産出されることにより、意味集合態を構成する既存の意味連関が崩れ、意味と意味との関係構図が変動をきたすならば、そうした意味集合態に基づく人間の有り方も変容し、空間についての解釈図式も変容する。そのことは、先に引用したパリのアパルトマンの例を見ても明らかである。エレベーターや給水用の配管が、世界により産出されることにより、世界の意味集合態の意味連関が変容し、そのことによって人間存在の意味適合による存在様式が変化するために、アパルトマンの上階の部屋と、下階の部屋の有する空間的意味が変化し、つまり空間についての解釈図式が変化するのである。アパルトマンの上階の部屋は貧乏人が住む部屋であり、下階の部屋は金持ちが住む部屋である、ということは、空間についての一つの意味付けであり、空間についての解釈図式に基づいている。すなわち、アパルトマンという空間的構築態において、上に位置する空間がより価値の低い空間、貧乏人が住むべき空間であり、下に位置する空間がより価値の高い空間であり、金持ちが住むべき空間である、という空間についての価値の序列は、上の空間と下の空間との関係における、空間の意味付けに基づく。上の空間が貧乏人が住む空間であり、下の空間が金持ちが住む空間であるという空間の序列化自体が、空間の意味付けであり、そうした空間の意味付けに基づいて価値付けが為される。そして、そうした空間の意味付けの解釈図式は、エレベーターや給水用配管という新しい有意味的存在者の出現により、世界の意味集合態の関係構図が変化し、それに伴って人間存在の有り方が変わることにより、変わる。つまり、上の空間と下の空間の意味付けが逆転するのである。

(2-7)

このような解釈図式は、既に述べた如く、自己の現在の有り方の超越による、自己の有り方についての理解の変容態である予期において、特に適用されるのであるが、その場合に、地平ということが問題になる。地平とは、ガ

ターマーによれば「一点から見えるすべてのものを包括し、囲み込む視界 (der Gesichtskreis) である。」<sup>22)</sup> 我々はこの地平という概念を文字通りに理解する。すなわち、身体的存在が存在する座標軸ゼロ点から、視覚に入る領域、空間的広がり、そこにおける意味連関の連なりを地平と呼ぼう。あるいは、比喩的な意味で、ある事象についての理解された全体的広がりを地平と呼ぼう。従って、私の身体が有る「ここ」において視覚的に把握される空間的広がり、諸々の有意味的存在者の間の相互連関の構造的把握に解釈図式を適用する場合に、地平を意味的に捉える、ということになる。あるいは、視覚的に捉えることは出来なくても、何らかのデータに基づいて、ある事態や事象の全体像が把握された場合に、それに解釈図式を適用する時に、そうした事態や事象には意味が付与される。

「実際、我々が絶えず自分のすべての先入観を吟味しなければならないが故に、現在の地平は絶えざる形成の過程の中で把握される。特に、過去との出会い、そして我々がそこから来るところの伝承の理解が、そうした吟味には必要である。それ故に、現在の地平は過去なしでは決して形成されないのである。現在の地平がそれだけで存在するのでもなく、獲得されるべき歴史的な地平が存在するのでもない。むしろ理解とは、つねにそれだけで存在しているかの如く思われる諸地平が融合して来る過程である。」<sup>23)</sup>

解釈図式の適用による空間の意味化は、身体的存在が存在する「ここ」から展開される地平において、伝統的なものと新しいものとを融合すること、すなわち世界の内の意味連関の連なりにおいて、伝統的な有り方の基盤となる有意味的存在者の空間内での配置と、新しい有意味的存在者の空間内配置とが融合して、空間の意味化が為されるのである。現在の地平は、過去に、すなわち伝統的な人間の有り方の媒体となる諸々の有意味的存在者の連関に基づいて形成されているのであり、また形成されつつ有るのである。ある場

---

22) H. G. Gadamer: *Wahrheit und Methode*, J. C. B. Mohr, Tübingen, 1975, S. 286.

23) *Ibid.*, 289.

合には、伝統的な人間の有り方の媒体としての有意味的存在者を淘汰し、それに代わる新しい有意味的存在者の連なりが地平の構成要素である場合もあるし、伝統的なものがそのまま現在の地平の構成要素となっている場合もある。いずれにしても、我々が空間を意味化する場合に、すなわち空間についての解釈図式を空間へと適用し、空間を意味化する場合に、伝統的な有り方を人間存在に促す有意味的存在者によって規定されている空間と、新しい有り方を人間存在に促す有意味的存在者によって規定されている空間とを意味的に区別する。空間に解釈図式を適用し、空間を意味化する、ということは、地平が伝統的な意味をもって意味化される面と、伝統的な意味に基づいて、あるいはそれを淘汰することによって形成された意味とによって構成されていることを明確化することであり、それが現在知覚している地平において融合していることを理解することである。既に述べた様に、解釈図式は、人間存在が意味集合態としての世界へと己れの存在を適合することによって獲得されるのであるが、そのように獲得された解釈図式は、諸々の有意味的存在者の意味へと己れの存在を適合せしめる際に、その存在者が占めている空間を意味化する道具となるのである。そして、空間を意味化することは、地平における諸々の有意味的存在者の連なりを総合して、地平を意味化することであり、その場合に、伝統的なものと、新しいものとの融合が地平において為されていることを理解する。人間存在の存在は、諸々の意味を前提にして構成されるのであるが、すなわち、人間存在の存在の内に諸々の意味への適合様式が刻印されることによって構成されているのであるが、伝統的な有り方は、新しい有意味的存在者の世界における出現によって、淘汰されてゆく場合もある。つまり、地平融合とは、ある場合には人間存在の有り方の転換を促すものである。例えば、文字を書くという有り方を確立する媒体としての有意味的存在者の伝統的なものは筆であったが、それが万年筆という有意味的存在者の、世界の意味集合態への出現によって、人間存在が筆で文字を書くという有り方は淘汰され、さらにボールペンという有意味的存在者の出現によって、万年筆で文字を書くという有り方も淘汰され、そしてワー

プロの出現によって、ボールペンも淘汰されつつある。しかし、それらは新しい有意味的存在者の出現によって淘汰されたが、例えばかつて武士が用いていた刀の様に、世界の意味集合態を構成する契機でなくなったのではなく、まだそれらは意味集合態の契機として、世界の内に残っている。意味集合態の構成契機としてのそれらを、それぞれ異なる時代に属する意味的地平に属していたことを理解することにより、現在の地平へと融合することが、地平融合である。それは空間的な意味配列についても言えるわけであり、大都会の真ん中に古い神社仏閣が、近代的な高層ビルと併存している場合に、空間の意味化は、地平融合において為されるのである。

また視覚的に捉えられる地平に、視覚的には捉えられない事象や事態を重ね合わせることにより、視覚的に捉えられる地平を解釈することも、ここでは地平融合と呼ぼう。視覚的に捉えられる視野は、そのみでは全てを語らない場合もあり、その場合には、視覚的視野が語らない面を補うために、視覚的には把握出来ない事象を重ね合わせることによって、視覚的に捉えられた面を明らかにすることも、ここでは地平融合と呼ぶ。

人間存在は己れの有り方についての理解、あるいはその変容態である予期において、つまり己れの有り方に基づいて、世界の意味集合態への己れの存在の適合によって獲得した解釈図式を適合することによって、空間を意味化するのであるが、その場合に、空間を人間存在の有意味的存在者を媒介にした有り方に基づいて、空間的に分節し、その分節された空間を意味化し、さらに伝承された存在者の占める空間、——それは人間に伝統的な有り方を促すのであるが、——と、新しく世界の内に出現した存在者の占める空間とを区別する、すなわち空間の歴史的時的分節化による空間の意味化の場合も、共に空間は、そこに存在して、人間存在のその都度の有り方を確立する媒体となる有意味的存在者によって規定されて、空間の意味付与が為される。

(2-8)

そうした事に基づいて環境としての空間に意味付与が為される。環境とは、既に述べた様に、<sup>24)</sup>人間存在を含めた生命体が自らの存在を根ざす場であり、有意味化された場である。人間存在が自然を環境化してゆくプロセスが歴史の一断片であるということが出来る。すなわち、人間存在の存在の錯綜態であり、かつ意味の集合態である世界の自己増殖によって、自然の環境化、すなわち自然を世界の内に取り込むプロセスが歴史の一側面であるということが出来る。従って、環境とは、人間的世界へと取り込まれ、意味化された自然を意味し、そこへと人間存在が自らが存在する場を獲得する空間である。それ故に、環境とは、本質的に空間的性格を有している。しかし、自然は、意味集合態としての世界の自己増殖によって、言い換えれば、無数の実存による自然への企投によって、世界の内へと取り込まれ、世界の意味集合態の構成要素となる限りにおいて、空間性を確保するのである。既に述べた様に、空間性とは、人間存在によって経験されることによって開示されるものであり、数量化された客観的空間性が問題となる場合でも、そうした人間による根源的空間性の派生態としてである。それ故に、人跡未踏の自然は、その様な意味において、まだ空間性を獲得していない、ということになる。それが、世界の内へと組み込まれ、有意味化されることによって、空間性として経験されるのである。既に述べた様に、空間が自らを開示するのは、人間存在による諸々の意味との関わりによってであり、それを基盤にして人間存在が存在していることに対して、空間が顕わになるのである。例えば、無限に広がっている様な森林を開拓して、そこに人間が住むことによって、かつて人跡未踏の森林であった場は、世界の内に取り込まれ、世界を構成する意味集合態の一契機になるのであるが、そのことにより人間存在は、そこを自らが存在する世界として、自らの有り方を接合するのである。そして、人間存在は開拓された森林が有った場に住むことによって、そこに有る諸々の存在者に意味を付与し、有意味化する。そうした諸々の有意味的存在

---

24)「環境のオントロジー」参照



者への関わりによって、人間存在は空間として経験するのであり、かつて人跡未踏の森林であった時には、無限の広がりを持つ様に思われた空間は、人間存在がそこに住み込むことによって、己れの世界としたならば、具体的空間として自らを開示するようになる。そのようにして、自然が世界を構成する意味集合態の一契機となることによって、人間存在は、空間についての解釈図式をそこに適用し、空間を意味化する。環境が意味化されるのは、まず環境内に存在する諸々の存在者に、人間が何らかのかたちで関わる限りにおいてである。言い換えるならば、それらが世界の内へと組み込まれることによって、人間存在はそこを自らが存在する場として、己れの存在をそこに有る諸々の有意味的存在者へと接合することによって、空間についての解釈図式を獲得し、空間としての環境を意味化するのである。従って、空間が空間として根源的に開示されるのは、意味集合態としての世界によってである。自然が世界の内に組み込まれることによって、世界を構成する意味集合態の一契機となることにより、すなわち、諸々の人間存在がそれへと関与する場へと開かれることによって、自然が孕む空間は空間として己れを顕わにするのである。すなわち、人間存在によって経験される空間となるのである。つまり、人跡未踏の自然は、意味集合態としての世界の外に有り、世界の構成契機となっていないのであり、それ故に、自然が有する空間も具体的空間として経験されず、茫漠とした不透明な空間としてしか自らを現さない。それが世界の内に組み込まれ、意味集合態の一契機となることによって、諸々の意味によって分節された空間として開示されるのである。言い換えるならば、人跡未踏の自然を世界の内に組み込むことによって、世界は空間を構築するのである。人跡未踏の自然は、世界の外に有る存在であり、従ってそこにおいて人間が経験する空間を有していなかったのであり、それが世界の構成契機として世界の内へと組み込まれることによって、人間が経験しうる空間として、自然はそれが孕んでいる空間性を開示するのであり、いわば世界によって自然は空間性として構築されるのである。

## (2-9)

従って、世界の外にある空間、世界の内に組み込まれていない空間は、意味化されていない空間、すなわち意味的に無化された空間である。それは意味-内-存在としての人間によって経験されえない空間であるが故に、意味集合態としての世界の外に有る空間である。従って、そうした空間は、人間にとっての環境ではない。そうした意味的に無化された空間、さしあたって人間存在が自らの有り方を構築するに際して、関わりのない空間が、環境問題を引き起こす要因となるのである。例えば、主婦が台所で食事の支度をし、食事が終わると食器を洗う、等々を為す場合に、主婦が差当り、自らの有り方を構築するために関わる環境空間は台所に有る諸々の有意味的存在者、すなわち水道の蛇口とか、洗剤、食器等であり、そうした諸々の有意味的存在者へと己れの存在を接合することにより、主婦は台所という空間を空間として経験し、開示せしめているのである。すなわち、台所に有る諸々の有意味的存在者へと関わることによって、その関わりの中で主婦は、台所という空間を体験し、この台所は狭すぎるとか、丁度良い広がりをもっている等々とかたちで、台所という空間を開示せしめるのである。そして、そのように開示された空間に、彼女の存在が諸々の存在者へと接合することに基づいて獲得した解釈図式によって、意味を与えるのである。つまり、彼女が台所として開示し、経験する空間に存在する諸々の有意味的存在者へと関わり、己れの有り方を確立するが故に、台所という空間は意味的なのである。主婦がそのような存在様式で空間に関わり、独自の空間性を構築するのは、無数の実存の痕跡としての伝承に基づく有り方を踏まえており、そうした伝承的有り方の上に、新しい有意味的存在者によって構成された新しい空間が付け加わっているのである。

ところがその際に彼女が関わる環境空間は台所だけであり、彼女が主婦としての有り方を確立するために必要な空間は、台所だけで事足りるのである。すなわち、下水道を伝わって流れ去り、近くの川に流れこみ、近海へと注ぎ込む汚水、つまり彼女が主婦としての諸々の存在者へと関わることによ

って果たした役割の結果生じた事柄は、いわば彼女の環境空間の彼方に有る事柄である。すなわち、汚水が流れ込む河川や海は、彼女の環境空間内には無いのであり、いわば意味的に無化されているのである。主婦が主婦としての有り方を確立する空間としての台所において、主婦が空間を意味的に開示しつつ、そこを自らの存在を確立する場としている限りにおいて、主婦にとって、汚水が流れこむ河川や海は環境ではなく、彼女が台所という意味空間をそれとして開示する限りにおいて、河川や海は無意味化された空間である。しかし、河川や近海は、意味集合態としての世界の内に組み込まれた空間であり、それらは世界の意味集合態によって開示され、意味付与された空間である。世界は汚染されている河川や近海を、汚染された空間、汚染された環境として意味付ける。言い換えるならば、意味集合態としての世界へと己れの有り方を接合している諸々の人間存在は、相互主観的に、汚染された河川や海をそのように意味付ける。すなわち、世界の内に組み込まれ、分節された諸々の空間の汚染は、意味集合態としての世界を維持してゆく上で、危機として捉える。何故ならば、河川や海は、世界の意味集合態によって意味付けられることによって、それらの空間は世界の意味集合態を維持してゆく上においてそれなりの機能を果たしている意味空間だからである。それらが汚染されて、機能を果たさなくなることは、世界がそれらに付与した有意味性が破壊されることであり、それは世界の意味集合態の危機に繋がり、結局人間存在がその意味集合態に組み込まれて、諸々の有り方を確立することを不可能にすることに繋がってゆく。社会システムとしての行政は、河川や海の汚染をそのように捉えた世界の要請によって調査し、生活污水が原因であることを突き止める。すなわち、社会システムは、河川や海の汚染と、主婦等が日常性の確立において流す汚水とを因果的に結び付ける。すなわち、河川や海の汚染という空間の意味付けと、世界の意味集合態へと組み込まれて、そこで己れの日常性を構築するために、それらの諸々の有意味的存在者の意味へと己れの存在を適合する事態とを結び付ける。すなわち、地平融合が為される。つまり、河川や海の汚染という地平と、人間存在の日常性の確

立という別の地平，時間的歴史的に異なる両地平を融合することによって，河川や海の汚染という事態を解釈する。すなわち，社会システムに帰属する人間存在は，システムによって配分された役割の遂行，すなわち河川や海の汚染の調査をするという，関与する意味領域を限定されることによる役割の遂行において，河川や海という空間を，汚染された空間として意味付ける。彼のそうした空間についての解釈図式は，一般的なものであるが，それに基づいて，彼は河川と結びついた諸々の空間連関を辿ってゆき，各家庭の下水に至る。すなわち，システム内存在としての彼は，河川の汚染と，人間存在の日常性の確立という二つの地平を融合することによって，河川の汚染を解釈する。

(2-10)

社会システムとは，既に述べた如く，構造的に配列された意味の全体性であり，そこに帰属することによって人間存在は，意味への適合領域を確定された役割として存在し，システム内の構造化された意味秩序へと自らの存在を適合せしめることによって，あるいはそのことの延長としての，システム外の世界の諸々の存在者へと関わることによって，己れの役割を遂行する。都道府県や市の下水道課という社会システムに帰属している人間存在は，そのシステムを構成する構造化された諸々の意味の全体性へと己れの存在を適合せしめることによって，空間についての解釈図式を獲得する。その解釈図式は，そのシステムに帰属していない人間存在の解釈図式と異なり，河川の汚染という意味化された空間を，ただそれとして解釈するのではなく，汚染という結果に対して，その原因へと遡及するというかたちで解釈図式を適用する。すなわち，河川の汚染という与えられた意味的空間，地平に，もう一つの別の地平を融合せしめることによって，河川の汚染として解釈された空間に，その原因としての時間的歴史的な側面を付け加える。すなわち，河川の汚染として意味付けされた空間は，長い年月をかけて生活污水が流れこんだためである，といった風に，空間に時間的側面の意味付けを為す。

今述べた例は、主婦としての役割を遂行する人間存在にとってのみ、意味的に無化された空間は、汚染される以前から世界の意味集合態の一契機として、組み込まれていた。ところが、近年問題になっている地球の温暖化現象や、オゾン層の破壊問題の場合には、空間が世界の内に組み込まれていなかった場合である。地球の温暖化現象の場合には、石油等のいわゆる化石燃料の消費に原因があるとされている。化石燃料の消費は、例えば、自動車の使用とか、工場などで為されるのであるが、その場合に、大気という茫漠とした空間は、無意味化されている。つまり、世界の内に取り込まれて、世界の意味集合態の構成契機に成っていない。自動車を運転する人にとって、彼がシステム内存在としての己れの役割遂行のために自動車を運転しているのであろうと、意味-内-存在として自動車を運転しているのであろうと、彼にとってさしあたり関わりのある空間は、自動車という存在者の閉鎖された空間であり、そしてその空間に意味付与するための、その空間内に配分された諸々の器具、つまり諸々の有意味的存在者であり、それらへと己れの存在を適合せしめることによって、自動車を運転するという有り方を確立しているのである。また、彼にとって関わりのある空間は、自動車がその上を走行している道路であり、その道路が到達する先としての目的地である。それらが、自動車を運転するという有り方を確立している彼にとって有意味的空間であり、彼の頭上に茫漠と広がる大気は、さしあたり彼が存在していることによって関わりのないものとして、意味的に無化されている。また、工場という社会システムに帰属している人間存在にとって、さしあたり関わりが有るのは、工場という社会システム内において配分された己れの役割の遂行のために関わるべき諸々の機械という有意味的存在者である。それらは、工場という社会システムによって、構造的に配分された意味秩序であり、一つの完結した全体性を構成している。彼はそれらへと関わることにより、与えられた己れの役割を果たすのであり、工場内の他の人間も、彼の役割と相関した役割を果たすことによって、全体としての相互主観的存在構造を作り上げているのである。すなわち、社会システムに帰属している諸々の人間存在が、各々

に与えられた役割を果たすことにより、全体としてのある行為構造が完成されるのである。従って、彼等にとってさしあたり関わりが有る空間は、己れの役割を果たす場としての工場であり、それは諸々の有意味的存在者の構造的配列によって意味付けされているのである。そして、システム内存在としての彼等が、工場という意味空間を構成する諸々の有意味的存在者の意味へと関わることによって、システムによって配分された己れの役割を果たすことにより、他者の役割との相互交錯の全体性が産出する二酸化炭素が放出される大気という茫漠とした空間は、意味的に無化されている。すなわち、大気という空間は、その場合に、相互主観的行為構造としての社会システムに組み込まれることによって、役割を遂行する人間存在にとっても、意味集合態としての世界に自らの存在を接合して存在を確保している人間存在にとっても、有意味化されていない空間であり、従って、環境ではないのである。ところが、二酸化炭素の大気中への放出によって、地球の温暖化が問題になることにより、大気が意味をもった空間、すなわち彼等にとっての環境と成ってくるのである。つまり、自動車の運転による二酸化炭素の放出、工場での役割遂行の相互連関における二酸化炭素の放出という地平と、大気の温暖化ということが結びつけられて、ここでも地平融合が生ずる。調査機関である社会システム、例えば OECD の環境委員会とか、環境資源研究所等に帰属する人間存在は、社会システム内の構造化された意味連関へと己れの存在を超越せしめることによって、己れの存在を予期しつつ、二つの地平を融合せしめるのである。システム内に内属する人間存在は、システム内の諸々の有意味的存在者の意味へと超越し、かつ己れの存在を予期することにおいて、つまりシステム内でのその都度の己れの有り方を確立することによって、化石燃料の使用の増加という地平、すなわち視圏の内に与えられた諸データの連なりと、地球の温暖化という別のデータに基づく地平とを融合するのである。既に述べた様に、システム内存在としての人間存在が己れの存在を関わらしめる意味領域は、システムによって限定されているが、それらは特殊な意味領域であり、その役割を遂行しないシステム外に存在する人

間存在は関わらない領域である。システムに内属する人間存在は、そのような意味領域へと己れの存在を関わらしめつつ、確立した己れの存在を理解し、また予期する中で、二つの地平を融合するのである。すなわち、システム内存在としての人間存在が、システム内の構造化された諸々の有意味的存在者へと己れの存在を関わらしめ、己れの有り方を確立し、また確立した存在によって開かれた現前野を超越することによって、来たるべき己れの存在を予期する中で、関与する特殊な領域である二つの地平を融合することによって、日常的有り方の確立に基づく現前野からは理解しえないメカニズムを明らかにするのである。

地平融合によって、二酸化炭素の放出と、地球の温暖化という二つの事態が結び付けられる以前には、自動車を運転することによって己れの日常性を構成している人間存在も、工場というシステムに内属しつつ、システムによって配分された役割を遂行している人間存在も、それぞれの有り方についての予期は、現前的な空間的意味配列への関与によって確立される己れの有り方に限られていた。すなわち、自己の有り方の確立が地球温暖化へと繋がり、いずれは自己の存在の危機に至るであろう、というところまでは予期しえなかった。ところが、こうした地平融合によって、自己の存在の危機についての予期が可能となる。すなわち、各々の日常的有り方の確立においては、無意味化されていた大気という茫漠とした空間が、各々の存在可能性の条件となって各々の有り方へと関わる事態となる、すなわち意味化された空間、環境となるのである。

オゾン層の破壊についての同じ図式で説明しうる。日常的な存在の確立においては、つまりヘヤースプレーの使用や、冷蔵庫の使用という有り方において、己れの存在の予期を、オゾン層という知覚しえない空間との関わりにおいて行なうことはない。しかし、ここでも地平融合が為されて、己れの日常的有り方の確立としてのフロンガスの使用と、オゾン層の破壊が結び付けられることにより、それまでは無意味化されていた空間としてのオゾン層が、自己が将来に亘って存在してゆくための条件としての環境として有意味

化されるのである。

従って、環境問題についての空間的側面からの説明、すなわち環境問題が生起する存在論的根拠の空間的説明は、以上述べた如く、日常的には無意味化されていた空間が、社会システムによる地平融合によって、己れの日常的有り方という別の地平と結び付けられることによって、意味化される、すなわち己れが存在する上において必須な環境としての意味を有するようになること、そしてそうした事態が、己れの存在の危機に繋がってゆく、という事態である。

自己の日常性の構築においては、関わりのなかった空間が突然、自己が存在する上において必須な条件として、突然重大な意味を有するようになる事、しかもその空間が、自己が存在するための条件として、危うい状況に有る時に、環境問題として、その空間と自己の存在との存在関係が結び付けられるのである。

#### 【付記】

本稿は徳山大学総合経済研究所一号研究Aに基づくものである。

また本稿執筆に際して、ルーマンの社会システム理論について、高崎経済大学名誉教授土方昭先生より貴重な御助言を頂いた。勿論有りうる誤認識については、筆者の責任である。